

クリケット 中大サークル



キングスグローブでバッティングの指導を受ける部員たち

本場オーストラリアに学ぶ

私たち、英吉利倶楽部(イギリス・クラブ)は日本では珍しいクリケットをするサークルで、本場の伝統の技を身につけるために、2年ごとにオーストラリア遠征を行っている。創立された年から行われていて、今回の第6回遠征はシドニーで2月27日～3月11日、13日間の日程で行われた。参加者はサークル員の主に旧学年1、2年生中心の34人で、私はこの遠征に一部員として、そして学生記者として参加した。

クリケットは、オーストラリアではスポーツの華としての存在であり、国民のそれに対する熱は予想していた以上のものがあり、私たちの体験は時間やお金に替えられない貴重なものばかりだった。

(学生記者・柿元理榮)

価値ある “全敗”

クリケットというスポーツは、日本では一般的にあまり知られていないが、世界的に見ると、競技人口は第2位で、イギリスやオーストラリア、パキスタンなどで広く行われている。中大チームは今年で創立12年

になるが、学生はずっと「本場のクリケットを味わいたい。クリケット文化を肌で感じたい」と思ってきた。日本には本格的な練習場もなく、フィールドすらない。他のチームと試合をするためのグラウンドは野球



① シドニー大での試合(校舎がきれい)
 ② 試合風景(ボーリング=投球)
 ③ " (バッティング)

場などで、場所の確保にもひと苦労
 クリケットが盛んな国の実情はどう
 なっているのか。部員一人ひとりの
 本場に対する興味は尽きない。これ
 が第1回目からの私たちがオースト
 ラリア遠征を行う目的であった。

最初の遠征の実現の陰には、ただ
 ならぬ苦労があった。当時、通信手
 段として一番高度だったのはFAX
 で、現地の試合相手をしてくれる
 チームを探すにも、どこに連絡して
 いいのかわからない。そんな状況下
 で一年かけて企画を練り、ようやく

豪州評 「確実にレベルアップ」

実現したのだが、このおかげで、現
 地とのコネクションを築き上げるこ
 とができた。

今回のツアーでは、第1回を実現
 した時の代表でOBの松村謙一郎さ
 ん(日本クリケット協会代表)に現
 地と連絡をとってもらい、試合や
 コーチングのコーディネートをして
 いただいた。また、第2回時の代表、
 所洋一さん(西武トラベル勤務)に

飛行機やバスなどの手配をしていた
 だいた。しかも、お2人にはツアー
 に同伴していただき、これまでにな
 い心強いツアーが実現した。

試合は男女とも3試合ずつに行わ
 れた。男子の試合相手は、1試合目
 がエンデバースポーツハイスクール
 2、3試合目がキングスアカデミー
 というクリケット選手育成スクール
 のチームだった。

一方、女子は1試合目がセント
 ジョージ高校チーム、2試合目がフ
 レンチェン女子大チーム、そして3
 試合目はシドニー大チームとの対戦
 となった。

結果は男女とも全敗。出発の一カ
 月前から強化練習を積んできた部員
 たちにとっては、非常に悔しい結果
 となったが、どの試合も私たちに
 とって多くの課題を発見でき有意義

なものとなった。片言の英語でつま
 く話ができなくても、競技のルール
 やプレーを通してお互いを諷え合っ
 たり、励まし合ったりと、最高のコ
 ミュニケーションができた。

現地のプレーヤーは、ほとんどが
 幼少の頃からクリケット経験を積ん
 であり、また、テレビをつければク
 リケット、公園へ行けばクリケット
 という環境の中で育ってきている。
 そのような人たちと対戦するのは予
 想以上のハンディがあった。文字ど
 おり、洗礼を受けた感じがした。

しかし、対戦相手の感想の中に、

「日本のクリケットは、確実にレベルアップしていると感じた」というものがあつた。現地で試合のコーディネートをしてくれた関係者の話によると「12年前には、日本のクリケットの技術がオーストラリアに追いつくのは最低でも30年かかると思っていたが、考えを改めないといけない」という感想もあつた。リップサービスとわかっていても、悪い気はしなかつた。

私たちはその言葉にとても励まされ、帰国したらもっと練習をがんばろうと誓いあつた。



① 女子専用スタンド(いまは男子もOK)
 ② シドニー大キャプテンと中大キャプテンのプレゼント交換
 ③ 試合後の交流。この日のMPV選手を祝福

見るもの聞くのも、すべて新鮮

「1日中、クリケット」

シドニーに到着した次の日、シドニークリケットグラウンド(SCG)でニューサウスウェールズ州対クイーンズランド州の試合を観戦した。クリケットの公式試合は1Dayといつて1日かけて試合をするのが最短のもので、ほかに1試合を3日間かけて行う3Day、4日間かける4Dayなどがある。観戦した

のは3Dayの1日目の試合で朝11時から夕方7時くらいまで行われた(クリケットを知らない人たちにとつて一番驚くところは、その時間の長さに違いない)。ワールドカップ級の試合になると、応援席のベンチは超満員になるそうだが、私たちが観た試合は観戦者はパラパラとしかいなかった。それでも私たちは、初めて観た本場の試合。フィールド

に釘づけになった。

「スポーツ店でコーチング」

全日程の中で、2日分のコーチングを受けることに費やした。初めてのコーチングは、キングスグローブというオーストラリア最大のクリケット用品販売店の隣にあるセンターで受けた。ここでは、クリケットのためのウォームアップの仕方や、バッティングマシンを使う際のバッティング練習などを行った。休憩時間には隣の販売店で日本では買えない道具を部員各自が購入した。

2回目のコーチングは、SCGのサイドにあるセンターで、プロ選手から受けた。ここではすべてのプレーにおける基礎から、さまざまな練習方法までを教わつた。最後には小さなシアターに案内され、内緒で撮られていた部員の練習風景を見ることができた。撮られているとは知らずに黙々と練習をする仲間を見てシアター内は笑い声に包まれた。

「同性愛者のパレード」

3月2日夜、私たちの泊まっていたホテルの近くの通りで、世界3大



- ① 試合に負けちゃっても笑顔で
- ② お世話になった方にTシャツを贈る
- ③ 試合後の野外ディナー

パレードの「マルデイグラ」が開催された。これは世界で唯一の同性愛者の祭りで、各国から多くの同性愛者や観光客が集まる名物行事である。女性よりも女性らしい男性や、筋骨隆々とした皮のパンツ一枚の男性——みんな自分をいかに目立たせるか競い合っているようだった。それを見ている観客の中には、同性の踊り子からキスを求められたり、体を触られたりして、「楽しそうに逃げ回る」姿も見受けられた。

日本では、性に関してあまりオープンではないので、同僚の部員はみな庄倒されるばかりで、新しい価値観を植えつけられたようだった。「上を向いて」を大合唱」

クリケットは紳士のスポーツだということ、歴史や礼儀はとも重んじられる。そういうわけで、クリケット界で神聖な場所というのはいくつかあり、その一つである「セントジョージ・クリケットターズクラブ」で、現地の人たちが、さよならパーティーを開いてくれた。そのクラブは、クリケットを知っている人は、必ず知っている伝統のクリケット、故ドン・ブラッドマンが所属

していたクラブで、どれだけ崇拜されている場所かというのは、パーティーでの通訳を頼んだ際、何人かが断わってきたという話から、察することができるところ。

お酒と片言の英語を交わしながらツアーの反省をし、パーティーの最後の方では、歌の交換をした。オーストラリアの人たちは聖者の行進のメロディーの応援歌、私たちは坂本九の「上を向いて歩こう」を歌った。別れ際には、ツアーを振り返ってか、現地の人たちのやさしさに触れてか、感極まって涙ぐむ部員もいた。

部員の心は一つ

日増しに募った クリケットの魅力

国と分かりあう。道具をぶら下げて街を闊歩するだけで、いろいろな人に声をかけられたという経験などを通して、その素晴らしさを痛感した。

★2年後、私たちの成長を期待してくれている現地の人たちに、もっと強くなった私たちの姿を見せつけた。全部員の思いは一つになった。

★シドニー空港からシティーへ向かう途中、公園でクリケットをして遊ぶ子供たちの姿をバスの中から見て感激したことから始まり、私たちは、いやというほどクリケット文化を肌で感じ、より一層クリケットに魅了された。

★スポーツを通して言葉の通じない